

衛門殿、其外役人大勢御引渡相済、同五月遠藤百右衛門殿至來ハ、城之繩張絵図等被成、江戸へ御持参、同八月中御普請始まり、惣堀、土手ハ沼田上之町清右衛門、中町忠兵衛、下之町源右衛門請負被仰付、御普請始ル、江戸よりとひのもの大勢召寄、町方子供大勢寄、千本搗ニおとらせ土手を踏堅メ仕立て候事見物事也、同御家中居宅、十一月中迄ニあら／＼出来也

(中略)

宝永元年甲申城御普請、御門、柵、内堀、続而屋形、□門等迄之目論見、坪尺、真庭村大工安之丞仕事、同三丙戌年有增出来事

(以下略)

【典拠】みなかみ町 真庭久氏所蔵 沼田城主曆代記録

【解説】これは同家の先祖が安永期に作成した冊子状の記録である。本

多領時代に名主を務めたことから、沼田城再築に関する具体的な記事が見える。これには土手を「千本搗」に踊らせたとあるので、改易時に埋めた堀を掘り返した際の土で、土手を築き踏み固めさせたことがわかる。東北大学所蔵の享保六〇七年に描かれた「上州沼田城図」の本丸堀の横に、「此所迄堀出来申候」とある註書きは、堀の復活を示したのであろう。それ以後も細部の工事が正徳初年まで行われたが、本丸と二ノ丸に建物を建てるとはなかった。その後の領主黒田氏と土岐氏は、本多氏が整備した城館や屋敷を引き継いだため、真田氏が築いた沼田城本丸跡の地中は、破城時のまま現在に至っている。

も、両史料でいう沼田景康というのも、同一人物を指しているわけではない。

沼田氏は、まず、沼田荘内にある小沢城から瀧棚の原と呼ばれる台地上に幕岩城を築き移つた。その後、沼田城を築いて移つたのである。沼田氏は、なぜ台地上に城を移したのだろうか。詳しくは、築城年代と関係づけて検討していく必要があるが、おそらく外部勢力との関係から、戦乱が大規模になつていく中で、より守りの堅い城が必要となつたためであろうと考えられる。

沼田城は、沼田台地の北西端に位置する。北に薄根川、西に利根川の崖がある。沼田公園の下公園の部分が「捨て曲輪（古城）」と呼ばれ、この部分が古い沼田城の本丸だったと考えられている。かつて武尊神社があつたところで、神社を段丘下に移してその跡地に城を築いたと記録されている。段丘下に移された神社が、今の榛名神社である。古い沼田城の本丸があつた下公園に立つと沼田氏の本領である沼田荘を眼下に見下ろすことができる。

「平姓沼田氏年譜略」によると、本丸の隣に星那曲輪が造られたとあ

第2節 文献史料から見た中世・近世の沼田城

1 戦国期における沼田城の戦略的位置づけ

沼田氏による沼田城の築城 沼田城を築城したのは、利根川と薄根川に囲まれた低地にあつた沼田荘を本領とする在地領主沼田氏であった。築城年代については、諸説あり見解が分かれる。それは、断定できる確実な史料がないためである。江戸時代に書かれた多くの記録では、実際にさまざまである。たとえば、「加沢記」では、沼田景康が永禄三年（一五六〇）に築いたとする。実際に百年以上の違いがある。しか

（一四五八）に築いたとし、「平姓沼田氏年譜略」では、沼田景康が永禄三年（一五六〇）に築いたとする。実際に百年以上の違いがある。しか

る。この星那曲輪の北側の斜面に薄根川方面に下る道があり、その道に沿って複数の曲輪が配置されていた（腰曲輪群）。今回の調査で、八つの曲輪が確認されている。築城時の沼田城（古沼田城）のつくりについては、今後更に研究を深めていく必要があるが、沼田氏が築いた沼田城は、沼田莊へと続くこの道を入り口とし、北側を正面とした造りだつたのではないだろうか。星那曲輪は、沼田城への入り口であり、ここから堀と塀を隔てて本丸へと向かったのであろう。沼田氏にとつての沼田城は、本領である沼田莊を守るために城であつたと考えられる。なお、沼田城は、戦国期まで「倉内城」と呼ばれたが、ここでは「沼田城」で統一して記述することとする。

北条氏による沼田城奪取 弘治二年（一五五六）、沼田康元という人物

が、赤見山城守に書状を送っている（史料1）。この沼田康元は、北条氏の御一家衆である玉繩北条氏の北条綱成の次男で、「沼田孫次郎康元」と称している。この時期、小田原北条氏が沼田城を奪取していたことが分かる。北条氏の沼田城奪取には、沼田氏の内紛が関係していると考えられている。沼田氏の内紛は、沼田頸泰とその子どもたちとの間で起きている。内紛の原因は、上部権力との関係で、今まで通り山内上杉氏につくか、新興勢力である北条氏につくかという路線対立にあつたと考えられる。沼田氏も地域の領主として単独で生き残ることはできず、より大きな大名との関係を保ちながら生き抜く必要があつたのである。隠居した頸泰は上杉氏方であり、沼田城主となつた子息弥七郎は北条氏方であつた。頸泰が弥七郎を殺害したこと、北条方の勢力を呼び込むことになり、沼田氏は没落してしまつた。その結果、北条康元が、「沼田孫次郎康元」として没落した沼田氏の名跡を嗣ぐ形で沼田城に入つたのである。

関東計略を進める北条氏にとって、沼田城は北部方面を支配する拠点として重要なものであつた。そのことを裏付けるように、倉内・小田原

間には、情報伝達手段としての伝馬が設けられている（史料2）。沼田城に入つた北条氏にとつて、まず重要なのは、上杉憲政を戴いて越後から攻め寄せる可能性がある越後長尾氏に備えることであつた。従つて、北条氏は、沼田氏の築いた古沼田城をもとにして、北への守りを固めたものと考えられる。

上杉氏の沼田城支配 永禄三年（一五六〇）、大軍を率いて越山した上杉謙信は、一気に沼田城を攻め落とした（史料4）。城を守っていた北条孫次郎（元康）は、討ち取られたとも言われ、また、落ち延びて後に氏秀と改名し天正一〇年まで活動していたとも言われている。謙信のもとには、旧沼田一族や家臣十四人が集まり、「沼田衆」として編成された（史料5）。

沼田城を落とした謙信は、さらに南下し小田原まで攻め上つたが、小田原城を落とすことはできず、いったん越後へと引き上げていつた。以後、謙信はたびたび越山を繰り返すことになる。上杉氏にとつて沼田城は関東侵攻のための重要な拠点となり、沼田城には上杉氏の家臣が城番として置かれた。最初の城番を務めたのは、河田長親であつた（史料7）。越山した謙信は、まず沼田城に入る。その後、廻橋城へ向かうコースと根利を抜けて東毛へ向かうコースで軍を進めた。その場合、古沼田城の造りからすると、利根川沿い・薄根川沿いの低地を移動したと考えられる。謙信越山後の沼田城も、北側を正面とした造りを継承し、強化整備されたものと考えられる。また、この頃、吾妻まで侵攻してきた武田氏も沼田城をねらつていた（史料8）。上杉氏は武田氏に備える必要もあつた。

永禄一一年（一五六八）から、上杉氏は北条氏との同盟を結ぶべく長い交渉に入った（越相同盟）。この越相同盟の締結に向けて、沼田城には上杉氏家臣である松本景繁・河田重親・上野家成らが在番衆として置かれ、交渉の窓口を担つてゐる（史料14）。越相同盟の敵は武田氏であり、

沼田城は、西の武田氏に対する備えを重視することになる。従つて、この時期は西側の強化整備が図られたものと考えられる。

元亀元年（一五七一）、越相同盟が破れ、北条氏と武田氏の同盟が成立した（相甲一和）。これにより、沼田城は上杉氏にとつて対北条の拠点ともなつた。そのため、沼田城の守りも南側を強化する必要が生じてくる。こうしたことが、沼田城が南側（あるいは東南）を正面とする造りに変化したきっかけとなつたのではないだろうか。

越後御館の乱と沼田城 天正六年（一五七八）三月、上杉謙信が急死すると、二人の養子の間で家督争いが起つた（御館の乱）。北条氏康の実子景虎と上田長尾家出身の景勝の二派である。沼田城の在番衆の多くは景虎方であつたが、景勝側につく者もあつた（史料19）。この内紛により、上杉氏の勢力は沼田から後退することとなり、これを好機ととらえて沼田城をねらつたのが、北条氏と武田氏であった。同年七月、沼田城は北条氏の手に落ちた（史料22）。一方、甲越同盟により上州支配を正当化した武田勝頼は、吾妻を拠点に沼田城を手に入れようと動き出した（史料27）。沼田城を接收した北条氏は、こうした動きに備えて沼田城の普請を行つてゐる（史料26）。

真田氏の沼田城入城 天正八年（一五八〇）頃から、武田氏の家臣真田氏が沼田城攻略に積極的に関わるようになつた。沼田領内の武士たちを懐柔する書状が見られる（「中澤文書」「森下文書」）。同年六月、北条氏の沼田城代であつた藤田信吉は、真田氏の懐柔を受け入れ、沼田城を武田氏に明け渡した（史料29）。この功績により、信吉は、武田勝頼から利根川東に三〇〇貫文の地を与えられ、沼須城主となつた。

勝頼は、沼田城の普請を真田昌幸に命じてゐる（史料32）。北条氏に備えるための普請であり、南側を正面として城郭が整備され、強化が図られたものと考えられる。沼田城に在城したのは、昌幸の叔父矢沢頼綱だつた。

天正一〇年（一五八二）三月、真田氏の主家である武田氏が織田信長によつて滅ぼされ、その信長も同年六月に本能寺の変によつて死去した。真田氏は、自立した戦国大名としての道を歩み始めるこことなつた。沼田領をめぐっては、同年一〇月に徳川氏と北条氏の間で国分けの協定が交わされ、甲斐・信濃は徳川氏に、上野は北条氏の「切り取り次第」とされた。この協定を楯に、北条氏は真田氏に沼田城の引渡しを要求するが、真田氏はこれを拒否した。以後、沼田領をめぐる真田氏と北条氏の戦いが、片品川を挟んで繰り返されることとなつたのである（「林厚一氏所蔵文書」等）。攻め寄せる北条軍を目の前にして、真田氏による沼田城の強化が、特に城の南側・東側を中心に図られたものと考えられる。

『加沢記』には、天正一三年（一五八五）九月に北条氏の大軍が攻め寄せた際、「領内の農民等がことごとく倉内に逃げ籠城した。その数は男女とも合わせて五千余人。」という記事がある。多くの領民を守るために城の役割を読み取ることができ興味深い。

片品川をはさんだ真田氏と北条氏の攻防は、天正一七年（一五八九）の豊臣秀吉による沼田領裁定まで続いた。真田氏は、繰り返される北条氏の攻撃を防ぎ抜いたのである。

2 豊臣氏による天下統一と沼田城

真田氏と北条氏の確執 沼田城は、天正一六年（一五八八）頃まで「倉内城」もしくは「倉内の城」と呼ばれており⁽¹⁾、まだ倉内城と通称されていた同八年に、武田勝頼の家臣だった真田昌幸が北条氏から奪い、支配を任されていた（史料32）。

だが氏康以来関東一円の領国化を進めていた北条氏にとつて、関東の屋根とも称された沼田領は、東の奥羽・北の越後・西の信濃に通じる防

衛の要衝であった。そのため北条氏は、翌九年、一〇年、一三年、一四年、一五年と沼田に向け執拗に出兵し、総力を挙げて争奪戦を展開した。特に織田信長亡き後の同一〇年一〇月頃に交わした徳川・北条の国分け協定で、甲斐・信濃は徳川、上野は北条の「切り取り次第」とされたことが、北条氏の沼田城攻略に追い打ちをかけた。

天下人の介入 北条氏と真田氏が沼田城争奪戦を展開していた頃、京都では、徳川家康を臣従させ九州を平定した豊臣秀吉が、天正一五年一二月に「関東・奥両国惣無事令」を発して以来、私的な領地拡大戦争を禁じ、天下統一の歩みを加速させていた。

そのような政情下で同一七年七月、豊臣秀吉が「沼田領三分の二と沼田城を北条氏に渡し、三分の一と利根川対岸の名胡桃城を真田領とする」分割案を北条氏に提示した（史料35・36・37）。いわゆる秀吉の「沼田領裁定」である。沼田城は北条氏の持ち城となり、城代の猪俣邦憲が家臣団の強化・経営を図っていた（史料38）。しかし、同一七年一一月三日、北条勢が真田勢の籠る名胡桃城を奪取したため事態は一変した（史料39）（2）。

北関東の辺境に位置する沼田城が、広く世に知られるようになつたのはこの頃からである。

上杉氏の普請 上杉謙信が関東に出兵して倉内城を攻略した永禄三年（一五六〇）以前に、沼田城は既に北条氏に接収されていたことが、弘治二年（一五五六）と永禄二年の北条文書からわかる（史料1・2）。沼田氏が築いた沼田城は、この頃に北条氏が改修したと推測されるが、詳細を伝える文書や絵図は見当たらない。

その後上杉氏の支配下に入つた永禄四年から、天正六年（一五七八）七月までの一六年間は、南から北条氏が、西からは武田氏が沼田城の攻略を目指していた。そのため上杉氏が、両軍の侵攻状況に対応した沼田城の修改築を行つたと考えられるが、「普請」を指示する文書はあるが、具体的な内容に触れた文書はみられない（史料19・23）。

令和二年度に実施した本丸北側斜面の測量調査で、沼田城から薄根川方面へ下る坂道沿いの林の中に、八か所の曲輪跡が確認された。所々に、薄根川の自然石で積んだとみられる石積が崩れかけて残っている。沼田氏時代に、本丸北側からの侵攻を想定して設けた可能性が大きい。

また永禄一一年の上杉輝虎書状には、佐野から連れて来た人質を曲輪に収容するよう指示した文言があるので、関東を転戦した上杉氏が永禄

東海道・北陸道からの豊臣軍が北条領の各城に迫つた。四月二〇日に松井田城、二四日に箕輪城が陥落したので、沼田城の降伏もその頃であろう。

小田原城は七月七日に投降し、天下人秀吉の前に北条氏の広大な関東領国が消滅した。北条氏の滅亡は、豊臣秀吉による天下統一の進行状況を軽視し、沼田城の帰属に固執した結果であった。

沼田城は、戦国乱世の終焉という歴史の大転換に、直接関わった城として広く記憶されるべき城である。

3 沼田城における普請

期に建設したものと考えられる（史料13）。

天正六年の御館の乱で、北条勢に加わった小野寺氏が、沼田城での働きを書き上げた戦功書に「馬出の土橋」、「水の手」の文言がある。沼田氏が築いた沼田城の様子も、戦功書のような後年の文書から考察する必要があるだろう（史料21）。

北条氏・真田氏の普請 天正六年に勃発した御館の乱で、沼田城将の河田重親は景虎方につき、七月には北条勢を沼田城に引き入れて占拠した（史料22）。一〇月には景虎から「沼田実城之儀任置候」と証文が届き、「城中普請番等之儀致之堅固」と指示された（史料23）。

景虎を支援する北条氏政も、家臣の清水氏に沼田城と廄橋城の普請を指示し、人足を派遣することを伝えている（史料26）。

翌七年三月に景虎の自害をもつて御館の乱が収束すると、乱の最中に結ばれた甲越同盟により上杉氏が上州から撤退し、北条氏が奪回した沼田城の城代は、河田重親が武田に通じたため藤田信吉に替わった（史料27）。

武田勝頼の命を受けた真田昌幸は、名胡桃城を拠点に攻勢をかけ、藤田ら沼田城将の調略に成功し、同八年六月には沼田城への入城を果たした（史料29・30）。勝頼は吾妻・沼田の支配を昌幸に委ね、翌九年には昌幸に支配条目を交付し、沼田城の普請を厳重に申し付けた。この時点では北条氏の襲来に備えて大規模な補強、改修が行われたと思われる（史料32）。旧倉内城の姿・景観は、この頃様変わりした可能性が高い。

「沼田記事」の「本城を東南に開き」という記述は、古沼田城が北を意識した造りだったのに対し、真田氏の沼田城は東と南からの攻撃に備えたことを伝えたかったのではないだろうか。

翌一三年二月には二の丸と三の丸を整備して「土手・枡形」を築き、九月にそれぞれの門が出来て普請が成就した。着手から二年半かかったと伝える。

だが同一〇年三月に武田氏が滅び、六月の本能寺の変で織田領国が瓦解すると、沼田城は沼田奪回を目指す北条氏の攻撃と、真田氏の必死な防衛戦が繰り返された。その過程で、堀・堤・馬出・枡形等の形状や規模の修改築が行われたり、建造物が建てられたりしたと考えられる。

新沼田城の造営 天正一〇年は真田氏存続の危機であった。武田氏の滅亡後、主家を滅ぼした織田信長に出仕したが、信長も明智軍の反乱で

自刃した。

これにより真田氏は寄る辺を失う危機に陥った。しかし織田領上野国の国主だった滝川氏が本国へ退避する混乱の中、ただちに沼田城を確保したのである。その迅速な決行が大名として自立する道を開いた。そして七か月後には自らが拠って立つ沼田城の築城に着手した。

国立公文書館所蔵の「沼田記事」に、真田氏が天正一一年二月に沼田城を新たに築いたことが次のように書かれている。

「本城を東南に開き」、木材を「河田山・師・後閑」から切り出し、石を「不動坂・奈良坂」から運び、「堀・土手・大門・裏門」を構え、本丸内に「広間・書院・居間・台所」等を配する御殿を築いた。工事には足軽五〇〇人と利根・吾妻の百姓が駆り出され、一年七か月後の一二年九月に完成した（史料33）。

この時築城された沼田城の本丸が現在の沼田公園に残る本丸跡である。真田氏は、北側の崖端から上越国境を眺望した古沼田城を廃し、やや高くより広い南側に本丸を移したのである。

「沼田記事」の「本城を東南に開き」という記述は、古沼田城が北を意識した造りだったのに対し、真田氏の沼田城は東と南からの攻撃に備えたことを伝えたかったのではないだろうか。

翌一三年二月には二の丸と三の丸を整備して「土手・枡形」を築き、九月にそれぞれの門が出来て普請が成就した。着手から二年半かかったと伝える。

沼田城が東南を意識した城であることは、「正保沼田城図」からも明確である。本丸入口の大門から続く四か所の門は、すべて本丸の東と南にあって枡形と馬出が付いている。

同じ年に上田城の築城も始まり、一三年末頃に完成した。真田氏は上田城も沼田城もほぼ同時期に築城したのである。城の構えや瓦等に共通点が見い出されるという（3）。

天正一七年七月、信幸の正室となる本多忠勝の息女を迎える「奥の作事」があり、「居間・書院・化粧の間・茶の間・中未ノ門・局部屋・風呂屋・湯屋」が建築されたことを「沼田記事」が伝えている（史料34）。しかしこれらの屋敷群が描かれた絵図や文献がないため、城内のどの位置にあつたかは確認できない。発掘で現れた「十人番所」のように、現本丸跡の花壇や二の丸、三の丸の地下のどこかに、遺構が眠っていると思われる。

沼田城争奪戦と普請 天正八年に真田氏が沼田城を確保すると、北条氏は奪い返そうとして執拗なまでに沼田攻めを繰り返した。国立公文書館所蔵の「加沢記」から、その具体的な様子を探ると次のようである。

一〇年一〇月に北条氏邦が軍を率いて長井坂城、阿畠の用害、鎌田の用害を奪い、沼田台地に上がって愛宕神社に本陣を置き、城の東から沼田城を攻撃した。矢沢頼綱が沼田・吾妻の武将たちを指揮して擊退したが、この籠城戦が、真田氏に東と南の防御を強く意識させたと考えられる。真田氏により新沼田城が築かれたのはこの戦いの後であった。

二年後の一三年九月にはさらに大軍が攻め寄せた。北条氏直・氏邦・氏照を大将とした大軍が三方から沼田城を攻めたのである。徳川氏の上田城攻めに呼応する沼田城攻撃であった。そのうち台地上の氏邦勢一万五千が沼田城に迫り、木戸口から城内へなだれこむと、城内に避難した領民も加わって、堀を越えようとする北条勢に対し奇策を用いて足止めした。そこへ二千余の真田勢が一斉に襲い掛かり城外へ追い散らした。領民を効率的に組織し働かせた矢沢頼綱の戦術と、武将たちの連携した活躍が功を奏し、この時も数倍の北条軍を退けた。

北条氏は、大軍で攻めながら二度も真田勢に負けたことを恥じて、翌年四月下旬に三度目の沼田攻めを行った。氏直を総大將に氏邦らがまたも大軍で押し寄せ、沼田城を七重八重に取り囲み、七千人余りが堀に架かつた橋を渡り大木戸から攻め込んだ。だが大木戸は頼綱がわざと開け

て置いたので、頃合いをみて橋を引き落とし、三の丸から鉄炮を打ちかけ石打ちすると、北条勢は出ようとして混乱し討ち取られた。そこで頼綱が一千余騎で打って出ると川へ逃れ溺れる者が続出した。

氏直は総攻めを決断し、降り続いた雨で増水した片品川の水が引くのを待つた。そこへ秀吉が小田原へ出陣するようだと、足利義昭からの知らせが届いたため、約ひと月費やした沼田城攻略を諦め帰陣したという。

この後一五年にも、猪俣邦憲が由良氏の軍と合流して沼田城を攻めたが、沼須の原で撃退した。

以上が、「加沢記」に書かれた北条氏と真田氏による沼田城攻防戦の大略である。惣堀と大手枡形は慶長一七年（一六一二）に築かれたので、この時点での堀は本丸堀と内堀の二条だったと考えられる（4）。したがって防衛ラインが長く伸びる前なので、籠城側の真田勢が重点的な守備固めと迎撃態勢を工夫できたことが、大軍を敗走させる結果に結びついたのかもしれない。

それにしても北条勢が城を取り囲んだこと、堀に架かった橋を渡したこと、三の丸から鉄炮を放ったことなどを考えると、北条勢の襲来を想定して工夫を凝らした修改築が、城内の様々な所で行われていたと考えられる。

しかし天正一七年七月の秀吉による「沼田領裁定」により、沼田城は北条氏に明け渡された。それから一年後の一八年七月には、名胡桃城事件を契機に北条氏が滅亡し、再び真田氏の持ち城となつた。

だがその間にも、豊臣軍が押し寄せることを想定し、北条氏による普請が行われたことだろう。「上州の守りは沼田城にかかるので、城代の猪俣氏自ら鍬を取」ってでも普請を急ぐようにと氏政が指示している（史料43）。沼田城は、天正一年の築城から七年の間に、大なり小なりの普請が幾度となく施されたことは間違いない。

4 近世沼田城の姿

天守の造営 小田原城が落城して間もない天正一八年八月一日、秀吉の命に従い徳川家康が東海から関東へ移った。諸将を要所に配置し関東防衛網を形成したが、沼田城には秀吉のお声がかりで真田信幸が入った。

豊臣大名として京都に屋敷を与えられた信幸は、文禄から慶長にかけて豊臣政権の公役負担を果たしていた。忙しく京都と沼田を行き来していた慶長元年（一五九六）二月、信幸は沼田城の天守造営に着手した。父昌幸とともに、秀吉の伏見城普請に従事する中でのことであった。その経験と技術を沼田城の天守普請に活かしたと考えられる。

「沼田記事」によると、六〇〇人の足軽と領内の農民に加え、信州からも動員した農民たちで「普請場は充々」という。一年後の二月に棟上げがあり一一月に完成した（史料47）。

五重の天守 「沼田記事」に「慶長元丙申年二月五日、殿守普請ニ打立、九間ニ拾間、五重ニ定メ、木村土佐守奉行ス」とあり、近郊の古刹吉祥寺に同年三月二八日付け「水役免許」の真田信幸朱印状がある。水役は普請に際して必要な水に関する負担とされる（5）。天守普請の水役負担を免除した朱印状と思われ、沼田記事の慶長元年着工を裏付ける（史料48）。

天守が五重であったことは、文献資料以外に「正保城絵図 上野国沼田城絵図」からもうかがえる。天守の屋根が最上階から二階の屋根までしか見えないが、二階の屋根の下に破風が東に一つ、南に一つ見える。破風は屋根の上に築くものなのでその下が屋根ということになる。

つまり絵図に描かれた天守は、本丸を囲む土手に建つた壙で、二階の屋根が見えない姿になつていているのである。ちなみに天和二年（一六八二）の破城時に使用されたと考えられる「中根家所蔵 上州沼田城図」でも、

天守は五重に描かれている（6）。

金箔瓦と菊・桐の紋使用 これまでの発掘調査で、金箔瓦・菊の紋の軒丸瓦・桐の紋がある軒平瓦が出土した。金箔瓦を城の屋根に葺くことは天正一八年以降豊臣政権の強い意志で行われたと考えられており（7）、また、菊紋・桐紋の使用は天正一九年頃から豊臣政権により規制されていた（8）。

信幸は秀吉の推挙で、文禄三年に後陽成天皇より「従五位下・伊豆守」に任じられたが、「豊臣信幸」と豊臣の姓が冠されている（史料46）。秀吉の近習を務めた弟の信繁と同様に、秀吉の直接指揮する大名であった。したがって沼田城は、関東の要衝にあつて徳川氏を牽制するという、秀吉の意向が働いた可能性が高い。

二万七千石の小大名が五重の天守を造営し、金箔瓦、菊紋・桐紋の瓦の使用を許された理由もそこにあるのであろう。関東で五重の天守を持つ城は、江戸城と沼田城のみであった。

近世の修改築 当地には「加沢記」や「沼田記事」を始め、それに類する近世の著述や写が数多く伝わっている。二次史料ではあるが史料批判を経た上で使用し、天守造営後に行われた沼田城の修改築を時系列に挙げてみる。

①慶長九年（一六〇四）正月、「西三階櫓」と「水の手門」を建設（史料51）。

②寛永九年、「表三階櫓」を建設（史料51）。

③寛永二一年、二代信吉が城内に鐘楼を建てる。

④同一七年二月、「三の丸」、「四の丸」を整備して、周囲に「土手」を廻らし「虎口」と「枡形」を取り付けた。観音堂の西に「堤」を築き、「惣堀」を掘つて水が流れるようにした（史料52）。

天正二年築城の沼田城は、慶長二年に天守が完成した後も、櫓・堀・堤・門等の普請を通して城域の整備、拡張が行われ、寛永一八年に

行われた表三階櫓の普請で成就したと思われる。

しかしその時点では、本丸の大門・裏門・西三階櫓など築城時の建造物は五七年、天守も四四年を経過していた。城の内外に様々な修復が行われたのであろう。また城下の発展を背景に、戦とは無縁な装飾が増えたかもしれない。本丸内にあった御殿やそれに付属する施設などにも同様のことが言える。

明暦二年（一六五六年）、松代藩主だった信之の隠居により、四代沼田城主だった信政がその後継として松代に移ったため、信直が五代城主に就任した。沼田城築城から七三年後のことであった。

その際の城引き渡しを報告した記録から、本丸内の御殿には「玄関」「金の間」・「大書院」「奥座敷」があり、「縁」でつながっていたことがわかる。また所々に「侍番所」があり、それらとは別に「惣曲輪」があつた（史料54）。

気になるのは④の記述で「觀音堂ノ西ニ堤ヲ拵ヘ惣堀ヲホリ流レニナス」とある。「流レニナス」とは余水を堀に集め、西側の段崖下に排水したことではないかと思われる。しかし、本丸堀跡の発掘調査で堀の法面から採取した土壤の分析では乾燥した環境が推測され、空堀だった可能性が指摘されている。正保城絵図では、三の丸堀は濃い青で、それ以外の堀は薄い青で描かれており、水堀・空堀を描き分けている様にも見える。沼田城の景観に関わる大問題である。

正保沼田城図で本丸堀の上に架かっていた橋は、信直の代になくなつたことが、猿ヶ京区有の上野国沼田城絵図でわかる。したがつて二の門から橋を渡つて本丸へ入つていたのが、信直の代に堀底まで下つてまた上がるようになつたのである。

天守の大改修 信直は城主就任早々に天守の大改造を行つた。祖父信之が造営した天守は約六〇年を経過し、腐食や傷みが進んでいたと思われる。

沼田記事によれば、万治元年（一六五八年）正月に「天守三階」、「二の門」、「三の門」、「四の門」の修復に着工し、七月にも「本丸の地形」を再整備し、「惣堀」と「天守修復」に着手したことが書かれている（史料53・54）。

また享保一六年に沼田記を書き写した奥書のある沼田物語には、「天守」「櫓」「石垣」が破損したので修復し、万治三年に成就したとあり、この時に瀧坂より土を運び「地形」を五尺余り上げたと伝えている（史料56）。

正保城絵図の天守をよく見ると、二重の上に望楼を載せたとみられる。したがつて万治元年の正月に「天守三階」を修復したとあるのは、望楼の最下部に当たる部分を三階と表記したものと考えられる。

しかし工事を進めるうちに、天守全体を大改造する方針に変わり、七月から土を盛り固めて天守台を五尺余り上げ、解体してあつた部材を再度組み立てて壁や内装の工事を行つたと考えられる。万治二年の「沼田藩台所方支出書上帳」に、「左官」「大工」への支払いが毎月みえるので、この年に天守の壁塗りや内装工事が行われたことは明らかである（9）。破損した「石垣」もこの時修復し、工事が終わるまで二年費やしたという。

取り壊された沼田城 天和元年一一月、幕府は五代城主だった信直を改易に処した（史料57）。沼田に城請取の上使が派遣され、一二月一九日に無事明け渡された。だが沼田領を代官に引継ぐ処理とその間の警備に当たつていた年の瀬に、城を取り壊すようにと幕府の通達が上使に届いた。

年が明けて正月三日から、請取に来た大名と目付や代官たちの家臣、約六五〇〇人が持ち場ごとに取り崩した。

「沼田城破却記」にその作業分担が記録され、各大名の持ち場や取り壊したもの等が、「二ノ門脇焰硝藏」、「土手柵之木掘崩ス」のように書かれている。城絵図ではわからないことの参考となるので次に挙げる

(史料58)。

① 本丸内には天守・御殿・台所・長屋・十人番所・三階櫓（西と東

の二棟）等の建物があり、御殿内部には広間・書院・居間・料理の間等があった。

② 家臣らが馬で城に来た時は、三の門を入った厩付近の下馬で馬を降り、二の門を通って本丸大門へ向かつた。しかし正保沼田城図には二の門から大門へ橋がかかっているが、天和二年の猿ヶ京区有沼田城絵図には橋がない。信直の代には堀の斜面を下り、堀底から大門へ上がるようになっていた。

③ 天守・三階櫓・大門の二階には、弓や鉄砲等の武器と馬具が格納してあつた。

④ 正月一一日から一三日のわずか三日間で天守を崩し終えた。

城域にあつた家臣の屋敷は町人に売却され、二の丸、三の丸の平地や堀跡は草が生い茂る明地となつた。

本多氏の再築とその後 元禄一五年（一七〇二）一〇月、幕府は取り壊した沼田城跡がどのような状態か調査、検分する使いを派遣した。翌一六年正月、老中本多正永に二万石を給して沼田藩を再立藩させるとともに、「沼田の領地に城築くべし」と命じた（徳川実紀）。

五月になつて代官より城地が引き渡され、再築の縛張りが行われたが、地鎮祭を執行して普請が始まつたのは八月末か九月初旬であつた。普請は沼田町の業者が請け負い江戸からも人夫を呼び寄せ、大手門と堀、その内側の枠形、それに外堀と外堀に沿つた土手が、その年内に出来た。

改元され宝永元年（一七〇四）となつた翌年に、近郷真庭村の大工が城・門・柵・内堀・館等の図面を作成して普請が始まり、同三年にほぼ出来上がつたという（史料59・60）。

再築普請は、翌四年も近隣村々に人足役を課して継続された。しかし

老人や児童を人足に出す村があり、本多氏の目論見通りに工事が進まかつた（10）。

そんな折の同四年一〇月四日、富士山が噴火し大地震が起きた。そのため本多氏は、城普請に従事する日雇いを連れて、江戸の復興を優先させたのである。年が明けて再開されたが、それ以後の沼田城再築は規模を縮小したか、計画を変更したかのどちらかであることが、東北大学図書館所蔵の「上州沼田城図」によつてわかる。

それは享保六・七年に作成され、本多家中の家臣の家に伝わつた城下絵図と思われる。本丸堀東外側の屋形（館）を中心として、大手門・西門・三の門・土手・枠形・家臣の屋敷・長屋等が整然と描かれている。しかし旧本丸から二の丸に当たる範囲には何も描かれておらず、二条の途切れた堀の間に「此所迄堀出来申候」と書かれている。堀の普請が中断されたままであることがわかる。

さらに特筆されるのは、旧本丸堀の内側が、天和二年に取り壊されたままの状態で描かれていることである。理由は不明だが、真田氏の天守や御殿、三階櫓等が建つていた本丸を、取り壊された當時のまま残し、本丸堀りの外に造営された館や役所群が再築の沼田城であった。

本多氏の後に入部した黒田氏も土岐氏も、本多氏が残した施設・建物を利用し増改築を加えていつたので、天正一一年以来の本丸跡は、大正期の沼田公園造成まで破城時のまま残されたのである。

まとめ 関東で戦国以来の領地を近世も保持した大名は、真田氏だけである。その真田氏が築いた沼田城の約一〇〇年に及ぶ変遷は、築城と防御に傾注した第一期、天守造営から近世城郭として完成した第二期、補修・改修に努めた第三期に区分できる。

だがそれは、戦国の終焉から徳川幕藩社会の確立期と重なる日本史上の一大画期であった。戦乱から泰平の世へ移り変わる社会変化の中での一大画期であり、景観に関心が移つていつた時代であつて、城も本来の役割が必要なくなり、景観に関心が移つていつた時代であつた。

た。

万治二年の「請取金子並びに支出書上帳」(1)に、城内で能の鑑賞や天守での茶会が行われたと書かれている。五重の天守に鯱が聳えた沼田城も、五代信直の頃には近世城郭に特有の威風が備わっていたのかもしれない。

註

(1) 永禄二年から天正一六年までの北条文書・越後上杉文書・武田文書で、「沼田城」の語が初出するのは永禄六年（一五六三）の「最乗寺本尊造立願文写」で、次は天正九年（一五八一）の「武田勝頼判物」である。「倉内」の表記が最も多く「沼田」「沼田之城」がそれに続き、天正一七年以後「沼田城」が多くなる。

(2) 赤見初夫「名胡桃城奪取事件とその周辺」（『群馬文化』三二三号、平成27年8月）が、事件の起きた日は「加沢記」の伝える一〇月二二日の可能性が高いことを論証している。

(3) 平山優「真田信之」（PHP文庫、一〇一六年）一二八頁によると、金箔瓦、軒丸瓦は上田城出土のものと同型であり、「上方で習得した技術を駆使して実施された形跡が明瞭である」という。

(4) 長野県立歴史館所蔵、飯島家文書「平姓沼田氏年譜略」による。
(5) 平山優「大いなる謎真田一族」一七三頁、PHP文庫、二〇一五年
(6) 福永素久「大分に伝わった沼田城絵図」『愛城研報告』第二二号、二〇一七年

(7) 加藤理文『織豊権力と城郭』七四項、高志書院、二〇一二年

(8) 「桐ノタウ・菊ヲ文ニツケハ、可爲曲事ト奈良中觸了」（『多聞院日記』天正十九年六月七日条、辻善之助編『多聞院日記』三教書院、一九三九年、国立国会図書館次世代デジタルライブラリー）

「衣裳之紋御赦免之外菊桐不可付之於御服拝領者其御服所持之間は着

之染替別之衣裳に御紋不可付候事」（『豊太閤大坂城中壁書』文禄四年、

近藤瓶城編『史籍集覽』第一三〇、近藤出版部、一九〇六年、国立国会図書館デジタルコレクション）

平山優（前掲）『真田信之』一二四頁

(9) 沼田市歴史資料館所蔵「加沢覚書草稿」紙背文書

(10) 『川場村誌 資料編』七一 宝永四年五月二六日「城普請人足につき谷地組村請手形」

(11) 藤井茂樹「加沢覚書草稿」の紙背文書と成立年代』『群馬文化』第三四六号、二〇二三年